

二〇一九年八月二〇日(参加者二三名)

コテージの尖りし屋根に月仰ぐ	小袖
朝涼の湖へ漕ぎ出す小舟かな	小袖
水菓食ふ施設の母の至福顔	小袖
長蛇なる貨車過ぎてより月涼し	小袖
産土の神馬の瞳いと涼し	小袖
蝉しぐれ山湖の面を響かせて	わかば
長き夜の恙の母の看取かな	わかば
古い母と気楽な昼餉冷奴	わかば
雨雫重しと萩の枝垂れけり	わかば
山肌を撫で上ぐるやに霧晴るる	たか子
広池を席卷せんと蟻叫ぶ	たか子
夙川の老松に添ふうす紅葉	菜々
新涼や路地の奥より機の音	菜々
爽やかや恥ずかしさうに席譲る	宏虎
秋暑し廃車山なす河川敷	宏虎

盆用意祖母えんぴつの走書き	よう子
誰もるぬ炎暑の交番電話鳴る	よう子
新発意の声変はりして盆の経	よし子
石鹼の灰かににほふ浴衣かな	よし子
夕風に網を繕ふ老漁師	素秀
蟻塚の穴に難儀す獲物かな	ぼんこ
両岸の木々澄む水へ迫り出しぬ	満天

定例会の選

二〇一九年八月二〇日(参加者二三名)